正面玄関前での集合写真。当時400人ほどの子どもたちが通っていた。
校舎は現在の野市小学校と違い、すべて木造だった

助け合う、自慢の学校

野市町は日本軍の日章飛行場(現高知龍馬空港)が近いこともあり、通学・授業中に空襲警報が鳴ることもしばしば。学校では子どもたちが全員そろうかどうかすらわからず、不安でたまらない毎日でした。「子どもたちにはけががないように」それだけが願いでした。

警報が鳴ると、すぐに上級生が下級生に付いて、講堂の床下などに避難しました。実際に飛行場へ向いて飛行機が飛んでいくのを見たことも。学校の時間外に警報が鳴ると、校長先生が自転車で子どもたちの無事を確認して回っていて、とても子ども思いの先生でした。

当時の校舎は今と違い木造で、爆弾が当たると一瞬で粉々になり、火が燃え広がることはわかっていましたので、子どもたちを守ることに教員全員が必死だったし、子どもたちも生き延びるための絆が強かったですね。授業中や登下校時を問わず上級生は下級生を守り、助け合うことが重要なんだということを身をもって学んでいきました。

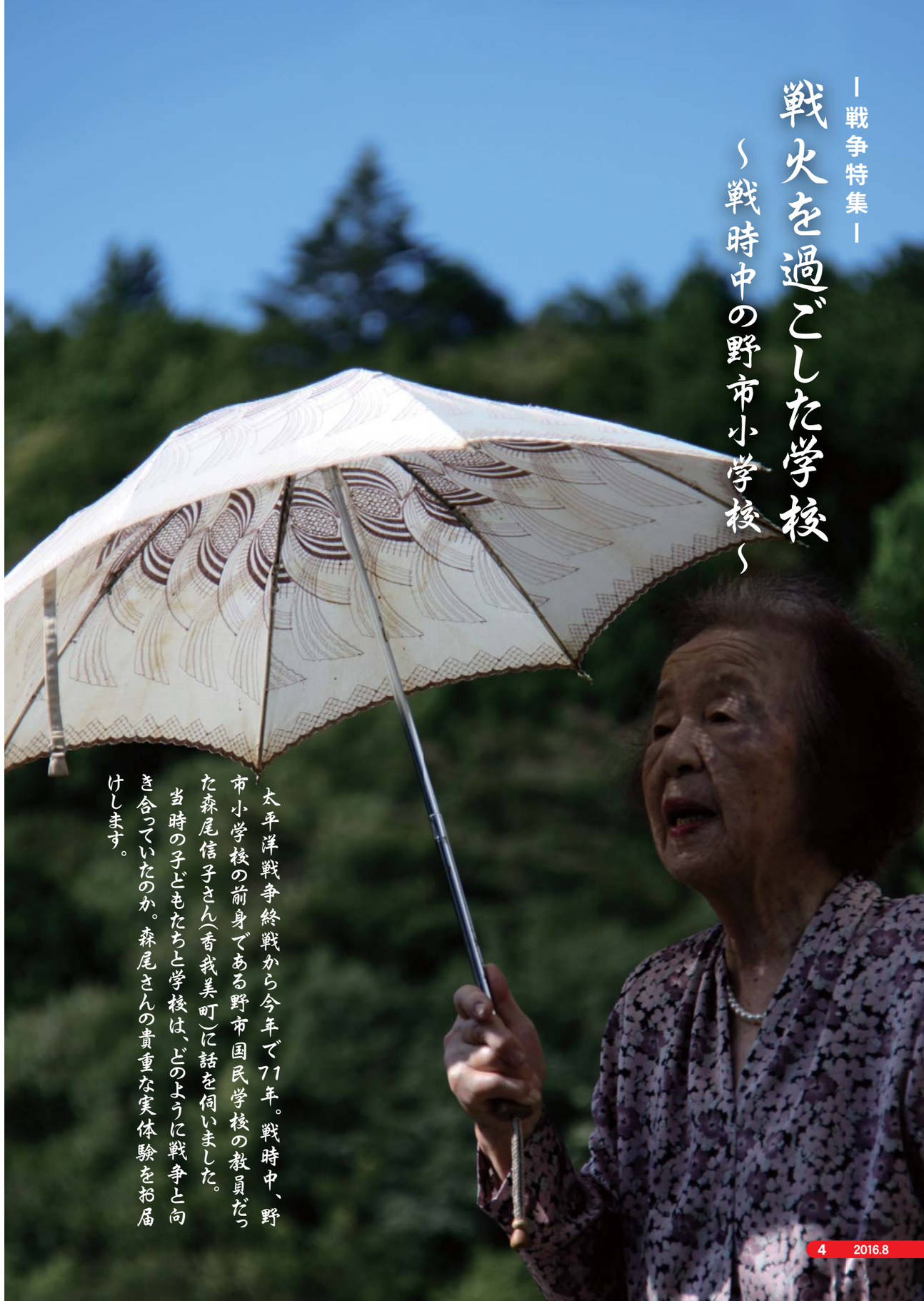
こんな時だからこそ

通学路にある家々の軒下で飛行機が通り過ぎるのを待って登校する子もいました。当時、給食はなく、お弁当を持ってくることになっていて、物資が少ない中、お弁当を持ってこられない子たちには分け合って楽しいお昼の時間を過ごしました。たくさん勉強し、たくさん話し、子どもたちは学校が大好きでした。みんな毎日を一生懸命生きていました。

平和が欲しかった

私は、どうしたら自分が国や地域に迷惑をかけずにいられるか、日本の情勢に協力できるかを聞きながら育ち「あれは駄目」「これは言うな」と教えられ、堅苦しい青春時代を過ごしましたが、「どうやったらみんなで協力して過ごしていけるか」に学校全体が敏感でした。

子どもたちは「兵隊ごっこはもうせんようにしよう!」などと自分たちでルールを決め、戦争が早く終わって平穏な毎日が訪れることを祈りました。



ー戦争特集ー

戦火を過ごした学校

～戦時中の野市小学校～

太平洋戦争終戦から今年で71年。戦時中、野市小学校の前身である野市国民学校の教員だった森尾信子さん(香我美町)に話を伺いました。当時の子どもたちと学校は、どのように戦争と向き合っていたのか。森尾さんの貴重な実体験をお届けします。